

国立国語研究所学術情報リポジトリ

高知方言のアスペクト形式と時間性に基づく動詞分類

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): Kochi dialect, aspect, change of state verbs whose resultative phases are maintained by agents, classification of verbs 作成者: 畠山, 真一, HATAKEYAMA, Shin-ichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002173

高知方言のアスペクト形式と時間性に基づく動詞分類

畠山 真一

(尚綱大学)

キーワード

高知方言, アスペクト, 主体(客体)変化結果維持動詞, 動詞分類

要 旨

高知方言は、ル形、ユウ形、チュウ形が対立する三項対立型のアスペクト体系を持つ。本論文は、高知方言に見られるユウ形とチュウ形の対立と中和の記述を通して、(1)状態動詞が一時性を表現するタイプと恒常性を表現するタイプに二分されること、(2)ユウ形とチュウ形の対立の中和現象は、変化結果後の状況が状態性と動作性という二面性を持つことに起因すること、(3)従来そのアスペクト的な位置付けが不明確であった動詞群の一部が主体(客体)変化結果維持動詞であることを主張する。

1. はじめに

高知方言の基本的なアスペクト体系は、完成相(ル形、タ形)、不完成相(ユウ形、ヨッタ形)、パーフェクト相(チュウ形、チョッタ形)の3つが対立する三項対立型をなしている¹。高知方言におけるル形(タ形)は、工藤(1995)の言うひとまとまり性、開始限界達成性、パーフェクト(タ形のみ)などを表現し、基本的に東京方言におけるル形(タ形)と同じアスペクト機能を持つが、その一方で、東京方言においてテイル形に集約して表現されている動作の継続と結果状態の存続は、高知方言ではユウ形とチュウ形に分化した形で表現され、三項対立型のアスペクト体系が成立している。本論文は、東京方言には見られない現象であるユウ形とチュウ形の対立がどのような様相を呈しているかを報告し、以下の3点を主張する。

- (1) a. 状態動詞を、一時的な状態を表現するものと恒常的な状態を表現するものに二分するという考え(鈴木 1979, 1983; 荒 1989; 樋口 1996; 工藤 2004a)に、高知方言は形態的な裏付けを与える。
- b. ユウ形とチュウ形の対立の中和現象において、主体(客体)変化により出現する局面に「結果状態」と「結果状態維持」の2つの側面があることが重要な役割を果たす。このメカニズムは、高知方言のみならず宇和島方言のヨル形とトル形の対立の中和現象の一部にもあてはまる。
- c. 現在までその位置付けが不明確であった現象動詞、長期活動動詞、心理動詞などは、鈴木(1979, 1983)、高橋(1985)、森山(1988)らが提案する主体変化結果維持を表現する動詞として分析されるべきである。

高知方言に見られる三項対立型のアスペクト体系は、アスペクト形式の音声的具現化は異なるものの、多くの西日本方言でも見られる特質である（工藤 2004b）。例えば、現在そのアスペクト体系に最も精密な記述が与えられている西日本方言の一つである宇和島方言も、基本的に動作継続を表現するヨル形と結果状態を表現するトル形を持つ。本論文では、宇和島方言と高知方言の違いにも目を配りながら、高知方言に見られるユウ形とチュウ形の対立を記述していく。

高知方言のアスペクトに関わる現象として、特に「状態動詞におけるユウ形とチュウ形の対立」と「ユウ形とチュウ形の対立の中和」の2つが重要である。前者について言えば、一部の西日本方言と異なり（工藤 1983, 1995; 木部 2004）、高知方言では、存在動詞のような状態動詞においても、「自分の部屋に{オル／おりユウ／おっチュウ}」に見られるように、三項対立型のアスペクト対立が見られる。この場合ユウ形は、存在の継続を意味し、チュウ形はパーフェクト（存在したことの痕跡の存在）を意味している。しかし、すべての状態動詞がこの対立を持つわけではなく、状態動詞の一種である関係動詞などはユウ形を持たない。本論文は、このような様相を見せる高知方言のデータに基づき、状態動詞を一時的な状態を指示するタイプと恒常的な状態を指示するタイプに二分するという従来指摘されてきた考え（鈴木 1979, 1983; 荒 1989; 樋口 1996; 工藤 2004a）には形態的な裏付けが存在すると主張する。

一方中和現象について言えば、ユウ形とチュウ形はほとんどの動詞で（状態動詞の一部ですら）対立を見せるのだが、一部の環境では中和を見せる。例えば、「座る」のユウ形、チュウ形である「座りユウ」と「座っチュウ」は、ニュアンスは異なるものの、同じ「座っている」という状態の継続を描写しており、ユウ形とチュウ形の対立が中和している。このような中和現象が見られる動詞には、「座る」に加えて、「立つ、勤める、飼う、映る、見える、疑う、飾る」などがある。本論文は、この中和現象の記述を通じ、現象動詞、心理動詞、そして長期活動動詞といった従来その位置付けが不明確であった動詞が、鈴木(1979, 1983)、高橋(1985)、森山(1988)の言う主体変化結果維持を表現する動詞の一種であることを明らかにする。さらに本論文は、この中和現象が、主体変化（客体変化）後の局面が「結果状態」と「結果状態維持」の二面性を持つことにより引き起こされると主張し、宇和島方言のヨル形とトル形の中和現象の一部も同じメカニズムによって発生すると主張する。

本稿の構成は以下の通りである。次節において、ユウ形とチュウ形の対立の基本的な部分を述べる。続く3節では、状態動詞のユウ形とチュウ形の対立、中和を観察し、状態動詞の分類に高知方言がどのような寄与を行なうかを述べる。4節では、ユウ形とチュウ形の対立の中和は、主体変化（客体変化）結果維持という動詞の語彙の意味によって引き起こされるものであることを主張する。続く5節において、本研究と工藤(1995)の研究を比較検討する。最後に、6節においてまとめをおこない、今後の課題について述べる。

2. ユウ形とチュウ形の基本的対立

この節では、高知方言のアスペクト体系の根幹をなすユウ形とチュウ形の対立について説明し、基本的にユウ形が限界未達成性を、チュウ形が限界達成性を表現していることを見る²。こ

れ以降のデータは、非過去の形であるユウ形とチュウ形のみを提示し、不完成相、パーフェクト相を代表させることにする。アスペク的な意味に関してこれ以降述べる観察は、断りがない限り、過去の形であるヨッタ形、チョッタ形にも等しくあてはまることに注意して欲しい。

先に述べたように、高知方言のユウ形は動作の継続を、チュウ形は変化結果の存続を表現するのが基本であるが、次のような多義性がみとめられる（吉田 1982；工藤 1983, 1995, 2004b；井上 1998）。以下のリストにおいて、(2)はユウ形の、(3)はチュウ形の多義性を例示したものである。

- (2) a. 弟が外で走りユウ（動作の継続）。
b. ロウソクの火が消えユウ（変化の進行）。
c. あっ、子供が池に落ちユウ（直前の外的兆候の存在）。
d. 人がどんどん死にユウ（多回的動作）。
e. あの人は毎日牛乳を飲みユウ（反復・習慣）。
- (3) a. 戸が開いチュウ（主体変化結果残存）。
b. 子供が砂山を壊しチュウ（客体変化結果残存）。
c. 昨日、雨が降ったチュウ（動作）パーフェクト）。
d. あの家は、通りに面しチュウ（状態・特性）。

ユウ形とチュウ形の特徴的な性質についてここで述べておく。

ユウ形は、工藤(1995)の言う主体動作動詞（主体動作・客体変化動詞も含む）の場合、動作の継続を表現し、主体変化動詞の場合、変化の進行もしくは直前の外的兆候の存在を表現するのが基本である。これらに加えて、(2d, e)に例示されるような意味を表現する場合もある。工藤(1983, 1995)が宇和島方言のヨル形に対して指摘しているのと同様に、ユウ形は動作の継続、変化の進行、直前の外的兆候といった用法をつらぬいて、「出来事の終了限界が達成されていないこと」（限界未達成性）を表現する。ここで「終了限界」という術語は、動詞の語彙的な意味によって指定されている限界性を意味しているのではない。ここではむしろ、動詞によって記述される出来事が実際に終了する時点を終了限界と呼んでいる。本論文では、混乱が生じない限り、動詞の語彙的な意味により規定される終了時点も、出来事そのものの終了時点も、同じ終了限界という用語を用いて表現する。このような意味で終了限界を捉えたとすると、(2d, e)の多回的動作や反復・習慣といった用法も、この限界未達成性に由来するものと考えることができる。すなわち、多回的に繰り返される動作や反復・習慣は、それによって記述される状況の終了限界が不定であり、ユウ形の本義である限界未達成性となじむと考えられるのである（工藤 2004b）。

続いて、チュウ形について見てみよう。主体変化動詞のチュウ形は主体変化結果の残存を、主体動作・客体変化動詞（以後、単に客体変化動詞と呼ぶ）のチュウ形は客体変化結果の残存を示す。これらの用法は、限界動詞のチュウ形が終了限界が達成された後の状態を表現することを示している。これらの用法に加え、チュウ形は、動作・変化が参照時(reference time)以前に完結し、その動作・変化の効果が残存していることを表現するパーフェクトの用法を持つ（工藤 1989, 1995）。工藤(1995)が宇和島方言におけるトル形に対して指摘しているのと同様に、チュウ

ウ形は、これら3つの用法をつらぬいて、「終了限界が達成されている」という限界達成性を表現している。すなわち、チュウ形は、変化・動作が終了した後の局面を記述するのに使われるアスペクト形式とみなすことができる。このため、客体変化を含意せず、語彙的に終了限界を持たない主体動作動詞のチュウ形の場合、終了限界が割りつけられ、主体変化結果残存や客体変化結果残存ではなく、パーフェクトの意味が生み出されると考えられる。反対に、語彙的な終了限界を持つ限界動詞、例えば主体変化動詞のチュウ形の場合、主体変化結果の残存とパーフェクトの両方を表現することができる。以下の例を見よ。

(4) a. 目の前に、窓が開いチュウわえ (主体変化結果の残存)。

b. (部屋の中に書類が飛びちっているのを見て)

あたしらー(=私達)がおらん間に、窓が開いチュウねー。(パーフェクト)

ここまで見てきたように、限界動詞のチュウ形であろうが非限界動詞のチュウ形であろうが、チュウ形は終了限界が達成されたことを示す。ここで注意すべきなのは、チュウ形が、対応する宇和島方言のトル形と異なり、開始限界達成性を表現しないという点である(工藤 1983, 1995)。例えば、宇和島方言において、次の例の「食べとる」は、猫が魚を食べることが開始され(開始限界が達成され)、発話時においてもその動作が継続していることを表現できる。

(5) あ、猫が魚、食べとる。(宇和島方言)

これに対し、高知方言のチュウ形は開始限界達成性を表現することができない(井上 1998)。(5)に対応する高知方言の文「あ、猫が魚、食べチュウ」は、「猫が魚を食べおわって、食べた後の痕跡(魚の骨など)が残っている」というパーフェクトを表現する。このように、高知方言のチュウ形は、宇和島方言のトル形と異なり、開始限界には無関心であり、終了限界にのみ注目するアスペクト形式である。このチュウ形とトル形の意味的な差が、高知方言と宇和島方言の中和現象の差異を生む。この点に関しては、5節で論じられる。

このチュウ形の一般化の例外が(3d)の「状態・特性」として切り出された用法である。このチュウ形の状態・特性を表現する用法は、次節で状態動詞と共に考察が加えられる。

3. 状態動詞のユウ形とチュウ形

本節では、状態動詞のユウ形とチュウ形を考察し、次の一般化が得られると主張する。

(6) a. 一時的な状態を表現する状態動詞では、ユウ形とチュウ形の対立が見られる。

b. 恒常的な特質を表現する状態動詞はユウ形を持たない。

状態動詞には、存在動詞、所要動詞(「要る」, 「(お金が) かかる」といった必要性を表現する動詞)、関係動詞、特性動詞、可能動詞、および金田一(1950)の言う第四種の動詞などがある。順に見ていこう。

まず、存在動詞のユウ形とチュウ形について述べる。高知方言では、(7)に例示されるように、東京方言においてテイル形をもたない「いる(おる)」のユウ形、チュウ形が可能である³。

(7) a. あの子は、自分の部屋にしばらくおるぜえ。

b. あの子は、自分の部屋にしばらくおりユウぜえ。

c. どうもあの子、あの日、自分の部屋にしばらくおっチュウねえ。

(7b)は、「あの子は、自分の部屋にしばらくの間いる」という意味で、存在の存続が示されている。(7b)のように「おりユウ」という形で、存在の存続が表現された場合、一見すると(7a)の「おる」との違いが見出し難い。しかし、詳しく見てみると次のような違いがある。「存在の存続」を表現する「おりユウ」という表現は、発見の文脈では使えない。これは、宇和島方言において「おりヨル」(ヨル形はユウ形に対応する)が発見の文脈で使いにくいことと全く並行的である(工藤 1983)。次の文を見よ。

(8) いや、弘史が|おる／?おりユウ|!

(8)は、「弘史がいることを発見し、驚いた」という意味だが、このような文脈では、ユウ形が使いにくい。ただし、次のように「まだ」を付けると正文となり、「発話時以前から継続して存在することに驚いた」という意味ならば適格となる。

(9) いや、弘史がまだおりユウ。

この観察は、状態動詞のユウ形も、限界未達成性、すなわち、「以前から続く事態／状態が終了していない」という根本的意義を保持していることを示しており、「以前からの状態の持続」という点で、状態動詞のル形とユウ形は対立を見せることがわかる。

一方、(7c)は、「あの子が、自分の部屋にいたという痕跡が発話時に残っている」ということを表現し、「痕跡の存在」というパーフェクトを意味している。(7c)が例示するように、存在動詞のチュウ形はパーフェクトしか意味しない。

続いて、もう一つの代表的な存在動詞である「ある」のユウ形とチュウ形の対立について考える⁴。次の例を見よ。

(10) なんばかつらいことが|ある／ありユウ／あっチュウ|ろうねえ。

この場合も、「おる」のユウ形とチュウ形と同様に、ユウ形は存在の存続を表現し、チュウ形はパーフェクトを表現して、対立が見られる。しかし、以下の例文が示すように、すべての「ある」がユウ形とチュウ形を持つわけではない。

(11) そこらへんに、はさみが|ありユウ／*?あっチュウ|ろう。

筆者は、(11)におけるチュウ形の座りの悪さを、モノの存在が痕跡を残すという文脈が想定しづらいためパーフェクトの読みが得られにくいことに起因する現象と考えているが、はっきりしたことはわからない。この問題に関しては、今後の研究が期待される。

続いて、「要る」、「(お金が)かかる」といった所要動詞を見てみよう。これらの動詞に関しても、存在動詞と同じく、「状態の存続」とパーフェクトという対立が見られる。以下の例を見よ。

(12) あの子は、長女の大学受験にお金がかか|るかかユウ／かかっチュウ|ねえ。

(12)のユウ形は、「お金がかかる」という状態が発話時も存続しているということ表現し、「状態の存続」の意味で用いられている。これに対し、チュウ形は「お金がかかる」という状態が以前に存在し、その痕跡が残存しているということ意味し、パーフェクトを表現する。

ここまで、存在動詞と所要動詞のユウ形とチュウ形は状態の存続とパーフェクトという対立を見せるという観察を述べた。これらの動詞は、事物のコンスタントな特性といった恒常的状态を

指示するのではなく、ル形で発話時を含む一時的でアクチュアルな状態を指示する（鈴木 1979；荒1989；樋口 1996；工藤 2004a）。したがって、ここまでの観察から、「一時的状態を表現する状態動詞はユウ形、チュウ形の両方を持ち、意味的に対立する」という一般化が導かれる。ただし、一時的な状態を表現する状態動詞が超時的な文の述語として用いられた場合、当然この一般化は成立しない。例えば、「かかる」が「結婚にはお金がかかる」という超時的な状況を表現する文で用いられた場合、「かかる」のユウ形とチュウ形は存在しない。これは、本来一時的な状態を表現する状態動詞が、恒常的特性を表現する動詞に転用された場合に見られる現象であり、先の一般化と矛盾しない。

では、恒常的な特質、状態を表現する関係動詞や特性動詞といった種類の状態動詞では、どのような状況が見られるのであろうか。(13)は、この種の恒常的状态（特性）を表現する状態動詞である関係動詞「異なる」の例である。

(13) 私の考えは、彼の考えと{異なる／*異なりユウ／異なっチュウ}。

(13)が例示しているように、関係動詞はユウ形を持たないが、チュウ形を持ち、三項対立のアスペクト体系がル形とチュウ形の二項対立に縮退してしまっている。さらに、ル形とチュウ形の対立はあくまで形態的なものであり、意味的にはル形とチュウ形は対立しない。すなわち、「異なる」と「異なっチュウ」はニュアンスは異なるものの、同じ意味を表現する。これは、東京方言において「異なる」と「異なっている」が意味的に対立しないことと並行的である⁵。

同様の状況は事物の特性を表現する「甘すぎる」、「似合う」といった特性動詞にも見られる。以下の例は「甘すぎる」の例である⁶。

(14) このケーキは甘すぎ{ル／*ユウ／チュウ}。

このように、特性動詞もユウ形を持たず、ル形とチュウ形が意味的な対立を示さない。

ここまでの議論から、事物の特性や事物間の関係表現する動詞はユウ形を持たないという一般化が得られる。この特性や関係といった状態は、事物のコンスタントな特質と考えられ、それ故に時間に縛られないポテンシャルなものとみなすことができる（鈴木 1979, 1983；荒 1989；樋口 1996；工藤 2004a）。よって、この一般化は、ポテンシャルな状態を表現する動詞はユウ形を持たないと言い換えることができる。

この一般化は可能動詞についてもあてはまる。日本語の可能動詞の用法として、大きく分けて、動作の実現を含意しない個体の（もしくは状況の）特性としての「潜在系可能」とその可能性（特性）の実現としての「実現（完遂）系可能」の2つがあることが知られている（奥田 1986；渋谷 1993）。潜在系可能は、(15a)によって、実現系可能は、(15b)によって例示される。

(15) a. あいつは、どんな難しい漢字も書ける。

b. (漢字テストを受けながらの発話) 昨日頑張ったから、どんな漢字も書けるな。

(15a)は、「あいつ」が指示する対象の持つ恒常的な特性を述べている文であるが、(15b)は、「どんな漢字でも書く」という意図が実現されていることを表現しており、明らかに(15a)と異なり、時間に縛られた意味を表現している。

この区別は、高知方言においてユウ形とチュウ形の対立の有無という形で反映されている。以

下の例は、高知方言において実現系可能を表現する可能動詞に関しては、ユウ形とチュウ形の対立が存在するが、潜在系可能を表現する場合は、その対立が見られないことを示している⁷。

(16) a. いや驚いた。あのおじいさん、歩けユウがやねえ。(実現された動作の進行)

b. ここにヨダレがついちゅうき、どうもおじいさん、歩けチュウねえ。(パーフェクト)

(17) おれは、どんな漢字でも|書ける／*書けユウ／*書けチュウ|。

これは、潜在系可能を表現する可能動詞はテイル形を持たないという(18)に例示される現象に対応した現象とみなすことができる(渋谷 1993)。

(18) *おれは、どんな漢字でも書けている。

最後に、「聳える」、「面する」といった恒常的特性を表現する「第四種の動詞」が、高知方言でどのように表現されるかについて述べておく(金田一 1950)。東京方言において、この種の動詞が文末にきた場合、テイル形が義務的に使われ、事物の特性という恒常的な状態が記述される。このような特性を持つ第四種の動詞は高知方言においてチュウ形しか持たない(「聳えチュウ」、「面しチュウ」という形しかない)。したがって、ここでも先に述べた「恒常的な状態を記述する状態動詞はユウ形を持たない」という一般化が当てはまる。

本節の締め括りとして、なぜ恒常的な状態を表現する状態動詞がユウ形を持たないかという問題を考えてみよう。これは、ユウ形の持つ限界未達成性に由来する現象と思われる。ユウ形は、「事態の終了限界が達成されていない」ことを表現するため、ある意味で「事態が終結する」ことを暗示する。このため、恒常の状態を表現する状態動詞とはなじまないと考えられる。

本節では、高知方言は特性動詞、関係動詞、第四種の動詞を除けば、状態動詞においてさえも、ユウ形とチュウ形が対立している言語であることを述べた。さらに、ユウ形とチュウ形の対立の存在は、恒常性と一時性という意味的対立を反映していることが明らかになった。この恒常性と一時性という意味的対立を反映する方言は高知方言のみではなく、青森県五戸方言および熊本方言でも類似の現象が見られる。これらの方言に見られる類似現象については、金田(2004)および村上(2004)を参照して欲しい。

4. ユウ形とチュウ形の対立の中和

1節で触れたように、高知方言には、ユウ形とチュウ形の対立が中和する環境が存在する。本節では、どのような環境で中和が発生するかを分析し、基本的に主体変化(客体変化)結果維持を表現する動詞で中和が発生することを明らかにする。そして、この中和現象は、変化後の局面が結果状態と結果状態維持という2つの側面を持つことに起因すると主張する。

4.1. 中和が見られる動詞

本節では、ユウ形とチュウ形の対立の中和が観察される動詞を概観する。以下は、この種の中和現象が観察される環境のリストである。

(19) a. 「着る」、「はく」、「かぶる」などの「身につける」ことを意味する再帰動詞(以後、着衣動詞と呼ぶ)

- b. 「飾る」, 「敷く」, 「広げる」, 「吊るす」, 「押さえる」などの奥田(1983)の言う「もようがえ」や「とりつけ」の意味を持ち, その状態変化・位置変化が可逆的であるような客体変化動詞の一部⁸
- c. 「座る」, 「立つ」, 「よりかかる」, 「しゃがむ」, 「のる」, 「ぶらさがる」, 「ねる」, 「おきる」といった姿勢変化を表現する動詞 (以後, 姿勢変化動詞と呼ぶ)
- d. 「つかまる」, 「にぎる」, 「かつぐ」, 「独占する」といった保持を意味する再帰動詞 (以後, 保持動詞と呼ぶ)
- e. 「映る」, 「光る」, 「照る」, 「咲く」, 「だまる」などの工藤(1995)の言う現象動詞の一部⁹
- f. 「思う」, 「疑う」, 「信じる」, 「望む」, 「あきれる」, 「安心する」, 「嫌う」, 「困る」といった心理動詞の一部 (以後便宜的に, 心理活動を表現し中和を見せる動詞を中和心理動詞と呼ぶ)
- g. 知覚動詞の「見える」
- h. 「住む」, 「暮らす」, 「勤める」, 「飼う」, 「つきあう」といった工藤(1995)の言う長期活動動詞

順に見ていこう。

まず着衣動詞であるが, この種の動詞は, 普通の環境では中和しない。以下の例では, ユウ形が動作継続を, チュウ形が主体変化結果状態を表現する。

(20) 新しい洋服を {着ユウ／着いチュウ}。

しかし, 次の文のように「まだ」や「いつまで」と共起させることにより「以前からの継続」を文脈に明示し, かつ非難の文脈においた場合, ユウ形とチュウ形の対立が中和される。

(21) まだ, そのいそうげな (=みすばらしい) 洋服を {着ユウ／着いチュウ} ががえ。

(21) は, ユウを用いてもチュウを用いても, 「その氣にくわない洋服を着ているという状態がまだ続いているのか?」という意味を表現し, ユウ形とチュウ形の対立が中和している。(21) に例示されるように, この種の非難の文脈に入ることにより, 例外なく着衣動詞はユウ形とチュウ形の対立の中和を見せる。

同様に, 「広げる」や「飾る」といった「もようがえ」や「とりつけ」を意味し, 可逆的な客体変化を記述する動詞の一部も, 普通の環境では中和しないが, 以下の例のように「まだ」や「いつまで」と共起させ, かつ非難の文脈に置くことで中和現象が見られる。

(22) a. いつまで, 風呂敷を {広げユウ／広げチュウ} がぜえ。

b. まだ御雛様があるち, いつまで {飾りユウ／飾っチュウ} がぜえ。

この場合, 主体変化ではなく, 客体変化結果が問題となっており, (22a) は「風呂敷を広げてあるという状態がまだ続いているのか」, (22b) は「御雛様を飾ってあるという状態がまだ続いているのか」という状況を描写している。

可逆的な客体変化を意味する「もようがえ」動詞や「とりつけ」動詞において, 以前からの継続を明示した非難の文脈で中和を見せる動詞には, 「広げる」, 「飾る」以外に以下のようなもの

がある ((23)は、奥田(1983:26, 28)における「もようがえ」動詞と「とりつけ」動詞のリストから、着衣動詞、保持動詞を除き、中和を見せる動詞を抜き出したものである)。

- (23) a. もようがえ: 開ける, かたむける, しばる, 閉める, たばねる, 閉じる, 伸ばす, 開く, 広げる, ふせる, 干す, ほどく, まくる, (髪を)まとめる, むすぶ, 結う
b. とりつけ: あてがう, あてる, (花を)いける, 置く, 掲げる, 隠す, かける, 重ねる, 飾る, かつぐ, かぶせる, 着せる, 据える, 添える, 供える, つるす, 貼る, ひたす, もる

しかし、可逆的な客体変化を意味する「もようがえ」動詞、可逆的な位置変化を意味する「とりつけ」動詞がすべてこの種の中和現象を見せるわけではない。たとえば、「汚す」はもようがえを意味する客体変化動詞だが、ユウ形とチュウ形は対立する。同様に、「とりつける」はまさに「とりつけ」を意味する客体変化移動動詞だが、この動詞でもユウ形とチュウ形は対立する。また一般に、「とりはずし」を意味する客体変化動詞は、この種の文脈に入れてもユウ形とチュウ形の対立は中和しない。

ここまで述べてきたような「広げる」、「飾る」といった動詞では、ユウ形とチュウ形の対立が中和するためには特殊な文脈が必要であったが、「動かないように力をくわえて固定する」を意味する「押さえる」、「支える」といった客体変化動詞では、特別な文脈なしにその対立が中和する。以下の「押さえる」の例を見よ。

- (24) 戸が開かんように、お父さんが押さえ {ユウ/チュウ} きね。

(24)の例は両者とも、「父親が戸を押さえて固定している」という状態が、発話時においても継続していることを表現している。

上記の着衣動詞と客体変化動詞の一部という2つのタイプの動詞は、「押さえる」、「支える」といった例外を除いて、基本的にはユウ形とチュウ形の対立があるが、特別な環境が整うと中和が見られるというものであった。反対に、(19c-h)にあがっている動詞は、特別な環境なしに、ユウ形とチュウ形の対立が中和される種類のものである。以下の例を見よ。

- (25) a. 座りユウ/座っチュウ(姿勢変化動詞) b. 携帯を握りユウ/握っチュウ(保持動詞)
c. 映りユウ/映っチュウ(現象動詞) d. 疑いユウ/疑うチュウ(中和心理動詞)
e. 見えユウ/チュウ(知覚動詞) f. 住みユウ/住んジュウ(長期活動動詞)

これらの例では、「まだ」、「いつまで」といった「以前からの継続」を意味する特別な表現抜きに、ニュアンスの差はあるものの、ユウ形とチュウ形が、同じ状況(状態の継続)を描写するのに用いられ、対立が中和するのが普通である。

次節において、(25)にリストされる動詞が、「見える」という例外を除き、主体変化結果維持を表現する動詞の一種であることが明らかになる。

4.2. 中和現象と主体変化結果維持を表現する動詞

本節では、特別な文脈なしで中和現象を見せる(25)の6つの動詞、すなわち、「姿勢変化動詞」、「保持動詞」、「現象動詞」、「中和心理動詞」、知覚動詞である「見る」、「長期活動動詞」を

分析し、これらの動詞が「見る」という例外を除いて、主体変化結果維持を表現する動詞であることを述べる。

4.2.1. 主体変化結果維持を表現する動詞とは何か

まず、主体変化結果維持を表現する動詞（以後、結果維持動詞）がどのような動詞であるかを説明する。

従来、日本語の動詞は、その時間性に基づき大きく状態動詞と運動動詞に二分され、運動動詞は、さらに、主体変化動詞、主体動作動詞、主体動作・客体変化動詞という下位分類を持つとされてきている（工藤 1995；金水 2000）。結果維持動詞とは、主体変化動詞と主体動作動詞の間に位置する動詞であり、主語が表現する対象の変化、変化の結果状態、その変化結果を維持するという動作の3つが語彙的に指定されている動詞である（鈴木 1979, 1983；高橋 1985；森山 1988）。この動詞カテゴリには、以下のような動詞が含まれるとされている¹⁰。

- (26) (車に)のる, すわる, たつ, ねる (=横になる／ねむる), こしかける, よりかかる, シャがむ, ねむる, おきる, (手に)もつ, にぎる, ぶらさがる, (花が)さく (鈴木1983: 442)

すなわち、結果維持動詞は、先に述べた姿勢変化動詞、保持動詞、現象動詞を含む動詞カテゴリと考えられる。

このような外延を持つ結果維持動詞は、変化とその変化の結果状態を維持する動作の両方を記述するため、主体動作動詞に由来する非限界動詞性と主体変化動詞に由来する限界動詞性の両方の特質を持つ。まずこの点を説明しよう。この種の動詞が見せる非限界性は、結果維持動詞によって表現される維持動作が持つ時間的性質である。維持動作の終了限界は語彙的に指定されていないため、結果維持動詞は主体動作動詞のような非限界動詞の特質を持つ。その一方で、結果維持動詞は主体変化を描写する側面を持っており、主体変化の結果状態が出現しさえすれば、動詞が表現する事象が完結したと言って良い。この点で、結果維持動詞は限界動詞の側面を持つ。限界性と非限界性のどちらの特質が前景化するかは文脈に依存して決まる。

また、結果維持動詞により記述される変化の後に出現する状況が、主体変化後の結果状態とその結果状態を維持する動作という二面性を持つという点も非常に重要である。言い換えれば、結果維持動詞により記述される結果状態と結果状態維持は、変化の後に出現する同一の状況を別の角度から見た性質付けであると考えられる。

ここまで述べてきたような結果維持動詞の特質は、以下のテストによって確かめられる。

- (27) a. 「～した瞬間」が「～しハジメタ瞬間」と言いかえられるかどうか（森山 1988）¹¹。

b. 「～したのはいつ？」という文に「発話時に～している」を前提とする読み（これを結果残存読みと呼ぶ）があるかどうか。

- c. 「～しながら」と「～したまま」が交替可能であるかどうか（森山 1988）。

結果維持動詞は、この3つのテストのすべてにパスする¹²。以下に、これらのテストが何を判定しているかを述べ、結果維持動詞である「のる」がこの3つのテストのすべてにパスすることを

確認する。

(27a)にパスする動詞は、動作動詞のように開始限界が語彙的に指定されており、かつ終了限界が無指定の非限界動詞である（(27a)を以後「瞬間」テストと呼ぶ）。以下の例文では、「走る」、「食べる」、「流れる」という非限界動詞が(27a)にパスし、反対に限界動詞である主体変化動詞「開く」、「落ちる」、「割れる」がパスしないことを示している。

(28) a. 走った瞬間＝走りはじめた瞬間、食べた瞬間＝食べはじめた瞬間、流れた瞬間＝流れはじめた瞬間

b. 開いた瞬間≠開きはじめた瞬間、落ちた瞬間≠落ちはじめた瞬間、割れた瞬間≠割れはじめた瞬間

ここで、結果維持動詞である「(サーフボードに)のる」がこの性質を持つことを確認しよう。

(29) サーフボードに{のった／のりはじめた}瞬間、雨が降ってきた。

(29)の「のった瞬間」と「のりはじめた瞬間」は言い換え可能であるので、結果維持動詞は(27a)にパスし、非限界性を示すことがこのテストにより確かめられた¹³。

対照的に(27b)にパスする動詞は限界動詞である（以後、このテストを「いつ」テストと呼ぶ）¹⁴。非限界動詞「食べる」および「走る」が「いつ」テストにパスしないことを以下の例文で確認しよう。

(30) a. カルビを食べたのはいつ？

b. 走ったのはいつ？

(30a,b)に「発話時にカルビを食べている」、「発話時に走っている」という結果残存読みはない。これに対して、限界動詞はこのテストにパスする。以下の例を見よ。

(31) a. この部屋に入ったのはいつ？

b. 結婚したのはいつ？

(31)には、「発話時に、聞き手はこの部屋に入っている」、「発話時に聞き手が結婚している」という結果残存読みが存在する。これらの動詞と同様に、結果維持動詞である「のる」は、「のったのはいつ？」という文が結果残存読みを持つことから、このテストにパスし、限界動詞の側面を持つことを示す。

最後に、(27c)のナガラとママの交換可能性を見るテストについて説明する（以後、このテストをナガラ／ママ置換テストと呼ぶ）。ここまで見てきたように、結果維持動詞は、限界動詞の側面と非限界動詞の側面をあわせもった動詞である。この二面性は、(27c)の「～ながら」と「～たまま」が交替可能であるという特質にもあらわれている。「～ながら」には、「動作が継続している時に」という同時性を表現する用法と逆接を表現する用法があるが、ここで問題にするのは前者の同時性を表す用法である（以後、逆接を表現する用法については無視する）。一方、「～たまま」は「～した後出現する結果状態（主体の変化結果および客体の変化結果）が継続されている時に」を意味する。よって、主体動作を意味する非限界動詞には「～たまま」がつきにくく、結果維持を表現しない単なる主体（客体）変化動詞では置き換え不能である。

(32) a. {走りナガラ／?? 走ったママ}食べる。

b. ドアが|開きナガラ／開いたママ|音をたてた。(ナガラとママが置き換え不可能)

c. ドアを開け|ナガラ／たママ|, 音をたてた。(ナガラとママが置き換え不可能)

一方、結果維持動詞である「のる」は、(33)に見られるようにナガラ／ママ置換テストにパスする。

(33) サーフボードに|のりナガラ／のったママ|, 砂浜を眺めた。

このテスト結果は、「乗った後の状態を維持するという動作」と「乗った後の状態」が同じ時間幅を占めていることを示す。このナガラとママが置き換え可能であるという事実は、結果維持動詞が表現する維持動作と結果状態が同一の状況を別の角度から見たものであることを示している。

次節において高知方言でユウ形とチュウ形の対立の中和を見せる動詞の中で、「姿勢変化動詞」、「保持動詞」、「現象動詞」、「中和心理動詞」、「長期活動動詞」が結果維持動詞として分析でき、従来結果維持動詞とは考えられてこなかった中和心理動詞や長期活動動詞がこの結果維持動詞として分析可能であることを示す。

4.2.2. 結果維持動詞と中和

4.2.1節で説明した結果維持動詞の典型例が、姿勢変化動詞、保持動詞、現象動詞である。先に(26)としてあげた動詞のリストのうち、「(手にも)つ」、「(に)ぎる」は保持動詞に、「(花が)咲く」は現象動詞に分類され、それ以外は姿勢変化動詞に分類される。そして、この3種類の動詞はすべて、ユウ形とチュウ形の対立の中和を見せる。ここで、これらの動詞に前節で提示した3つのテストを適用し、結果維持動詞であることを確認したい。しかし、この確認をおこなう前に、テストに関して一つ注意しておきたいことがある。前節で提示した上記の3つのテストはすべて東京方言で構成されており、高知方言を用いたものではない。しかし、このテストで用いられている表現は高知方言と東京方言の間で、その意味・用法に違いが見られないものであるため、本論文ではこのままの形で前節で提示したテストを適用する。

この3つのタイプの動詞は、4.2.1節で見た結果維持動詞かどうかを判断するテストである「瞬間」テスト、「いつ」テスト、ナガラ／ママ置換テストの3つにすべてパスする。以下に、姿勢変化動詞の「座る」、保持動詞「(に)ぎる」、現象動詞「咲く」のテスト結果をあげる。

(34) a. 座った瞬間＝座りはじめた瞬間

b. 「座ったのはいつ？」に結果残存読みがある。

c. その椅子に|座りナガラ／座ったママ|, おいしいコーヒーを飲みたいものだ。

(35) a. (に)ぎった瞬間＝(に)ぎりはじめた瞬間

b. 「手を握ったのはいつ？」に結果残存読みがある。

c. ハンドルを|にぎりナガラ／にぎったママ|, サンドイッチを食べた。

(36) a. 咲いた瞬間＝咲きはじめた瞬間

b. 「きれいに咲いたのはいつ？」に結果残存読みがある。

c. その花は美しく|咲きナガラ／咲いたママ|, 微妙にその花卉の色を変化させていった。

先に述べたように、これらの動詞ではユウ形とチュウ形の対立が中和し、同じ状況を指示可能で

ある。これは、以下に例示される。

- (37) a. あの人、ベンチに {座りユウ／座っチュウ} ねえ。
- b. あの人、つまみを {握りユウ／握っチュウ} ねえ。
- c. きれいな花が {咲きユウ／咲いチュウ} ねえ。

結果維持動詞は主体変化動詞でもあるため、そのユウ形は「変化の進行」の読みを持っても良いと考えられるが、これらのユウ形の例には「変化の進行」の読みがない（「直前の兆候」の読みはある）。これは、ユウ形が結果維持動作の読みを強く優先することを意味している。

姿勢変化動詞、保持動詞、現象動詞という3種類の結果維持動詞が、ユウ形とチュウ形の対立の中和を見せるという事実は、ある意味当然の帰結である。先に述べたように、結果維持動詞は非限界動詞としての側面と限界動詞としての側面の両方を持っている。結果維持動詞が、結果状態を「維持」という非限界動詞として用いられた場合、そのユウ形は限界未達成性を表現し、結果状態を維持するという動作が持続していることを表現する¹⁵。一方、結果維持動詞が主体変化動詞という限界動詞として用いられた場合、そのチュウ形は「変化結果状態（＝変化達成後の状態）」を記述する。そして、4.2.1節で述べたように、この2つの記述は変化によって生じた結果状況を別の角度から見たものになっている。よって、ユウ形によって表現される維持動作の継続とチュウ形によって表現される変化結果は、同一の状況に対する2つの異なった記述にすぎず、当然対立が中和されるわけである。

続いて、中和心理動詞について見てみる。中和心理動詞の場合、「信じる」、「嫌う」といった例外を除けば、以下の「疑う」の例に見られるようにル形、ユウ形、チュウ形の対立が中和される。

- (38) 私は、息子が犯人やと {疑ウ／疑いユウ／疑うチュウ}。

「信じる」、「嫌う」の特殊性に関しては後で述べることにし、当面「疑う」のような大多数の中和心理動詞について議論していく。

中和心理動詞についても、ここまで見てきた動詞と同じ状況が観察される。以下に「疑う」のテスト結果をリストする。

- (39) a. 疑った瞬間＝疑いはじめた瞬間
- b. 「息子が犯人だと疑ったのはいつ？」に結果残存読みがある。
- c. 息子が犯人だと {疑いナガラ／疑ったママ}、彼女は、旅行に出かけた。

よって、中和心理動詞もここまで述べてきた動詞と同じく、結果維持動詞とみなすことが可能と考えられる。しかし、中和心理動詞とここまで述べてきた姿勢変化動詞、保持動詞、現象動詞とが異なっている点が存在する。それは、多くの中和心理動詞がル形で発話時を指示可能であるという点である（高橋 1985；工藤 1995；金水 2000）。以下の例を見よ。

- (40) 私は、そのソフトウェアを作った人が正気かと疑うねえ。

「疑う」をル形の述語としてとる(40)は、発話時における話し手の疑いを意味することが可能であり、発話時指示が成立している。紙幅の都合により、本論文ではこの現象を詳しく論ずることはできないが、筆者は遂行動詞が一般にル形で発話時を指示するのと同じメカニズムにより、この現象が発生すると考えている。この点に関しては、稿を改めて論じたい。

このように考えると、中和心理動詞に見られるユウ形とチュウ形の対立の中和に対しても、ここまでの議論がそのままあてはまる。すなわち、中和心理動詞のユウ形が結果状態維持として記述する状況とそのユウ形が結果状態として記述する状況が客観的には同一であるが故に、ユウ形とチュウ形の対立が中和するのである。

中和心理動詞に関する議論を終えるまえに2点述べておきたい。まず、「信じる」、「嫌う」の特殊性について述べる。これらの動詞は、その他の中和心理動詞と同じテスト結果を示すものの、ユウ形の座りが悪い。以下に「信じる」の例をあげる（畠山・加藤・伊藤 2006）。

(41) 私は、息子が無実やと信じ|ル／??ユウ／チュウ|。

この「信じる」や「嫌う」の特異性は、信念状態や嫌悪状態が、一度その状態に入ってしまうと「維持」といった特別な努力なしに継続されるものであることによると思われる。よって、通常の文脈では「維持動作」の意味合いがあまりないため、維持動作の継続（状態の維持）を意味するユウ形の座りが悪くなると推測されるのである。この「信じる」、「嫌う」のユウ形の容認度は、結果状態の維持動作に努力が必要となる非難の文脈を与え、維持動作の意味合いを強調することで改善される。以下の例文は完全に正文である。

(42) a. いつまで自分の息子が無実やと信じユウがぜえ。

b. まだ、あの子のこと嫌いユウががえ。

このデータは、上記の議論を支持している。

中和心理動詞に関する議論の最後に、すべての心理動作を表現する動詞がユウ形とチュウ形の対立の中和を見せるわけではないという点について注意しておきたい。人間の心的動作を表現すると考えられる「知る」や「分かる」ではユウ形とチュウ形が対立する。これらの動詞は、維持の側面を持たない主体変化動詞であり、それが故に対立するのである。

続いて、知覚動詞におけるユウ形とチュウ形の対立の中和について考察する。知覚動詞には、「～の匂いがする」、「～の味がする」、「見える」、「聞こえる」といった動詞が含まれるが（工藤 1995）、おもしろいことに、その中でも「見える」だけがユウ形とチュウ形の対立の中和を見せる。まず、「見える」以外の知覚動詞がどのような特性を持っているかを見ることにしよう。中和を見せない知覚動詞である「聞こえる」は、ここまで用いてきたテストに対して以下のような結果を見せる。

(43) a. 聞こえた瞬間＝聞こえはじめた瞬間

b. 「あの音が聞こえたのはいつ？」に結果残存読みがない。

c. 私は、走行中に異音が|*?聞こえナガラ／?聞こえたママ|、走りつづけた¹⁶。（交替不可能）

「聞こえる」は(43a)が示すように「瞬間」テストにパスするため、動作動詞のような非限界動詞の性質を持つことがわかる。そして、(43b)より「聞こえる」が限界動詞性を持たないことが示唆される。さらに、(43c)が示しているように、「聞こえる」は同時性を表現するナガラとむすびつかず動作性が低いことが示唆される。この動作性の低さを裏づける事実として、(44a)に見られるようにル形で発話時を指示し、(44b)に例示されるように「～前から＋感覚動詞のル形」と

いう構文をとり、発話時までの状態の存続を意味することができるという現象もあげられる。後者の性質は、「～前から＋存在動詞のル形」で発話時までの存在の存続を意味できる存在動詞と並行的なものである（(44c)を参照）。

- (44) a. 泣き声が聞こえる。
b. 1時間ほど前から、泣き声が聞こえる。（感覚動詞）
c. 1時間ほど前から、ここにいる。（存在動詞）

上記の考察から、「聞こえる」に代表される感覚動詞は主体変化動詞ではなく、開始限界が指定されている状態動詞的な非限界動詞と考えられる。このように「聞こえる」には主体変化の側面が欠けているため、以下の例に見られるようにユウ形とチュウ形は対立を見せる。

- (45) a. 犬の鳴き声が聞こえユウ。（状態の存続）
b. 犬の鳴き声が聞こえチュウ。（パーフェクト）

同様の状況は、「～の匂いがする」という感覚動詞にもあてはまり、「見える」以外の感覚動詞ではユウ形とチュウ形が対立する。しかし、「見える」は異なった状況を見せ、ユウ形とチュウ形の対立が中和される。すなわち、以下の2つの文は同じ状況「発話時において聞き手の股引が話し手の視野の中にある」を描写する。

- (46) あんた、股引が見え{ユウ／チュウ}でえ。

では、ここまで利用してきたテストに対して「見える」はどのような結果を見せるのだろうか。結果維持動詞であるかを判断する3つのテストの結果は以下の通り。

- (47) a. 見えた瞬間＝見えはじめた瞬間
b. 「山頂が見えたのはいつ？」に結果残存読みがある。
c. 私は、走行中に赤ランプが{＊？見えナガラ／？見えたママ}、走りつづけた。（交換不可能）

このテストが示すように、「見える」は、「瞬間」テストにパスし、ナガラ／ママ交換テストにはパスしない。特にナガラ節には入りにくく、「見える」の状態性が高いことが示唆される。さらに、「1時間前から見える」で発話時までの「見え」の継続を示し、その他の知覚動詞と同様に、存在動詞と似た性質を持っていることが示唆される。しかし、「見える」は、その他の知覚動詞と異なり、「いつ」テストにパスし限界動詞性を示す。この限界動詞性は、おそらく「見える」に「隠れていたモノが見えるようになる」という意味があることによると思われる。

このようなテスト結果から、「見える」には維持動作という側面が欠けていることが示唆され、結果維持動詞とカテゴライズすることはできない。では、なぜユウ形とチュウ形の対立の中和が発生するのだろうか。まず第一に、「見える」の主体変化動詞としての側面が重要である。この主体変化動詞としての側面がチュウ形を認可し、「見えチュウ」で「隠れていたものが見えるようになっていく」という変化結果状態を意味すると考えられる。他方、先に述べたように、知覚動詞は状態動詞と似通った性質を持ち、かつ開始限界を持つという特質を持つ。一般に状態動詞は開始限界を持たないとされているが、ここでの議論は、「見える」が、その他の知覚動詞と同様に、「開始限界を持つ状態動詞」という特殊な性質を持っていることを示唆している。高知方

言では、一時的な状態を記述する状態動詞もユウ形を持ち、状態の継続を意味するため、「開始限界を持つ状態動詞」とみなせる「見える」もユウ形が可能であり、「見えている」という状態の継続を意味する。そして、このユウ形で表現される局面は、「見える」が表現する主体変化（「見えている」という状態の開始限界）の結果生じた状態でもあり、チュウ形によっても記述可能である。このように、「見える」におけるユウ形とチュウ形の対立の中和は、この動詞が主体変化動詞の特質と（開始限界を持つ）状態動詞としての特質の両方をあわせもっていることに起因すると考えられるのである。

最後に、長期活動動詞を考えよう。長期活動動詞は、ここまで考察してきた中和を見せる動詞と異なり、「いつ」テストにパスしない。以下は、「勤める」のテスト結果である。

(48) a. 勤めた瞬間＝勤めはじめた瞬間。

b. 「この会社に勤めたのはいつ？」に結果残存読みがない。

c. A社に勤め{ナガラ／たママ}、新しいビジネスを起業した。

この結果をどのように解釈すれば良いのだろうか。「瞬間」テストと「いつ」テストの結果は、長期活動動詞が動作動詞のような非限界動詞であることを示唆しているが、反対にナガラ／ママ交替テストの結果は、この動詞が結果維持動詞であることを示唆している。

本論文は、(48c)のナガラ／ママ交換テストの結果を重視し、長期活動動詞も結果維持動詞と分析する。では、(48b)という反例をどのように説明すれば良いのだろうか。

長期活動動詞が「いつ」テストにパスしない理由は、長期活動動詞がまさに「長期活動」を表現することに起因すると考えられる。ここまで考察してきた結果維持動詞はすべて、維持動作がどこで中断しても良い事象を記述していた。したがって、ここまで考察してきた維持動詞は、結果状態が出現した瞬間に結果状態と維持動作が終了してもよく、結果状態が持続する期間について無関心である主体変化動詞（不可逆的な変化を表現する動詞は除く）と同じ性質を持ち、主体変化動詞としての性格が強い。それが故に、これらの動詞は、主体変化動詞の側面の前景化が容易であり、「いつ」テストにパスすると考えられる。しかし、今まで考察してきた動詞群と異なり、「長期活動動詞」は必ずある程度の時間、状態の維持動作を継続せねばならず、主体変化動詞としての性格が比較的弱いと考えられ、その結果、主体変化動詞の側面を前景化するのが困難であり、「いつ」テストにパスしないと考えられるのである。その一方で、ナガラ／ママ交換テストにパスするのは、「～たまま」という表現が変化を直接問題にしているのではなく、むしろ変化発生後の状態を問題にしているからと思われる。長期活動動詞により表現される維持動作が持続している過程は結果状態が継続している過程でもあるので、これらの動詞は当然ナガラ／ママ交替テストにパスする。ここまで述べてきた議論に基づき、長期活動動詞も、「いつ」テストにはパスしないものの主体変化動詞の側面を持ち、結果維持動詞であると本論文は主張する。

このように考えると、長期活動動詞におけるユウ形とチュウ形の中和現象も、ここまで議論してきた結果維持動詞の類型と同様に、ユウ形が結果状態維持の存続として記述する状況とチュウ形が結果状態として記述する状況が客観的には同一であるという点に求めることができる。

4.3. 着衣動詞と客体変化動詞に見られる中和現象

本節最後のサブセクションとして、中和現象を見せる残りの2つの動詞カテゴリーであるユウ形とチュウ形の中和を見せる客体変化動詞と着衣動詞について考察する。

まず、「押さえる」、「支える」といった特別な文脈を必要とせずユウ形とチュウ形の対立が中和される客体変化動詞について見てみよう。これらの動詞が、結果維持動詞と同様に、ユウ形とチュウ形の対立の中和を見せるのは、そもそもこれらの動詞が「動いているモノを固定化する」という客体変化、「固定されている」という客体変化結果状態、そしてその客体変化結果状態を維持するという動作の3つの側面を語彙化しているからと考えられる。すなわち、結果維持動詞が主体変化結果維持を表現していたのに対し、これらの動詞は客体変化結果維持を表現しているとみなせる。「押さえる」、「支える」が結果維持動詞に対応しているという主張は、前節で用いたテストの受け身版を使うことにより確認できる。もしこれらの動詞が客体変化結果維持を表現するならば、その受け身の形である「押さえられる」、「支えられる」は、主体変化結果維持を表現する動詞と同じふるまいをするはずである。次の「押さえられる」のテストの結果を見よ。

(49) a. 押さえられた瞬間＝押さえられはじめた瞬間

b. 「齊藤選手の腕が田中選手に押さえられたのはいつ？」に結果残存読みがある。

c. 太郎は警官に「押さえられナガラ／押さえられたママ」、わめいていた。

このように、「押さえる」の受け身形は、結果維持動詞を判定するテストのすべてにパスするので、「押さえる」が客体変化結果維持を表現する動詞であることがわかる。よって、これらの動詞のユウ形は客体変化結果状態の維持動作が継続していることを表現し、チュウ形は客体変化結果状態を表現する。その結果、結果維持動詞で見られる中和現象と同様に、ユウ形により「客体変化結果状態を維持するという動作の継続」と記述される状況とチュウ形により「客体変化結果状態」と記述される状況が客観的には同一であるため、中和が発生すると考えられる。

続いて、再帰的な主体変化を表現する着衣動詞について考えてみよう。先に述べたように、これらの動詞は、「まだ」や「いつまで」といった副詞句と共に用いられ、かつ非難の文脈に置かれなければ、ユウ形とチュウ形の対立の中和が発生しない。以下の着衣動詞「着る」の例を見よ。

(50) いつまでそのいそうげな（＝みすばらしい）シャツを「着ユウ／着いチュウ」がぜえ。

この中和現象は、着衣動詞の結果状態部分が非難の文脈に置かれた場合、非難に抵抗してその状態を維持するという意味をおびるということに依存すると思われる。着衣動詞は動作も表現するため、基本的にユウ形はこの動作の継続を意味する。その一方で、再帰的な主体変化の結果状態は「維持」といった特別な努力なしに継続し、チュウ形によって表現される。しかし、非難の文脈に置かれると、変化結果状態を継続させるためには、特別な努力、すなわち維持という動作が必要となる。これが、着衣動詞でユウ形とチュウ形の対立の中和が見られる原因と思われる。すなわち、非難の文脈を与えることにより、通常の主体変化動詞が結果維持動詞に変質してしまい、その結果、4.2節で述べた原理に基づき中和が発生すると考えられるのである。

この議論は、そのまま「もようがえ」、「とりつけ」を意味する客体変化動詞である「飾る」、

「吊るす」などにおけるユウ形とチュウ形の対立の中和現象の説明にも適用可能である。これらの動詞も着衣動詞と同様に、「まだ」、「いつまで」といった語句と共に非難の文脈に置かれなければ、ユウ形とチュウ形の対立の中和が発生しない。この場合も、先の着衣動詞と同じように、非難の文脈に置かれることにより、客体変化結果を維持するという側面が生み出され、ユウ形とチュウ形の対立の中和が生み出されると考えられる。しかし、ここまでの議論は、脱衣を意味する再帰動詞や「とりはずし」などの「とりつけ」以外の客体（移動）変化動詞に、なぜ中和現象が見られないかを説明しない。この点に関しては今後の研究を期待したい。

5. 宇和島方言との比較

本節では、宇和島方言におけるヨル形とトル形の対立の中和を扱う工藤(1995)の主張と本論文の主張の比較検討をおこない、あわせて宇和島方言における中和現象と高知方言における中和現象の差異が何に由来するかを論じる。

宇和島方言は、高知方言と同じように、完成相(ル形)、不完成相(ヨル形)、パーフェクト相(トル形)という三項対立のアスペクト体系を持ち、基本的に高知方言と同様の動詞群でヨル形とトル形の中和が見られる。この中和現象を見せる動詞には、高知方言で中和を見せる4節で議論した動詞に加え、「暑すぎる」、「甘すぎる」といった超過動詞、「作れる」、「読める」、「泳げる」などの可能動詞（実現系可能を表現する用法での可能動詞）、そして非限界動詞が含まれる。この非限界動詞に見られる中和現象は、先に述べた宇和島方言のトル形が持つ開始限界達成性を表現するという特質に依存し、以下の文で例示される。

(51) あんな沖の方に誰か{泳いどる／泳ぎよる} (工藤 1995: 283)。

(51)のトル形は、「泳ぐ」という動作の開始限界が達成されたことを表現し、「泳ぐ」という動作の継続を表現するヨル形とその対立が中和する (工藤 1995)。

これらの中和現象を見せる動詞の中で、特に現象動詞、長期活動動詞、心理動詞、感覚動詞、および超過動詞、可能動詞は、工藤(1995)においてひとまとめに状態性動詞と呼ばれている。これらの動詞は、終了限界が明確でなく、それ故に、宇和島方言のヨル形が表現する終了限界達成前とトル形が表現する終了限界達成後が明確に対立しえないと、工藤(1995)は述べている。さらに工藤(1995)は、心理動詞、知覚動詞、超過動詞ではル形で発話時指示が可能であることも指摘する。このル形で発話時指示が可能であるという特質は「ある」、「いる」に代表される状態動詞に最も良くあてはまるもので、この点でこれらの動詞は、状態性が特に高いと述べられている。

この主張には、2つの問題があると思われる。1つめは、状態性動詞における宇和島方言におけるヨル形とトル形の中和現象を「終了限界」の不明確さに求めているため、高知方言にこの主張を適用することができず、一般性にかけるという点である。この点について以下で考えよう。

もし、ここまで述べてきた工藤(1995)の説明が正しいなら、終了限界が不明確な状態動詞においても一般に中和が見られると考えるのが自然である。実際、この予想は、宇和島方言に当てはまる。宇和島方言では、「ある」、「おる」といった存在表現はヨル形のみを持ち、トル形を持たない（「おりヨル」で一時的な存在を表現する）。したがって、存在動詞においては、ヨル形とト

ル形の対立が形態的に消失してしまっており、工藤(1995)の主張を間接的に支持している。しかし、3節で詳述したように、高知方言においては、「おる」という存在動詞がヨル形にあたるユウ形、トル形にあたるチュウ形を持ち、意味的な対立も見られる。よって、工藤(1995)の主張を高知方言にそのまま適用するのはむずかしい。すなわち、高知方言では終了限界が不明確な状態動詞においてユウ形とチュウ形が対立するため、終了限界の不明確さを中和現象の原因とすることはむずかしいのである。

もう一つの問題点は、ル形で発話時指示をするという特性から心理動詞が状態性が高い動詞であるという結論を導くことができないという点である。4.3節で述べたように、ル形で発話時指示が可能な動詞には状態動詞以外に遂行動詞が存在する。工藤(1995)の議論は心理動詞が遂行動詞性を持たないという根拠を与えておらず、その可能性を排除していない。したがって、この点でも工藤(1995)の主張には、疑問の余地がある。

工藤(1995)の主張とは異なり、本論文での主張は宇和島方言でも基本的には問題なく成立する。すなわち、4節で見たように、本論文で言う結果維持動詞におけるヨル形とトル形の中和を、動詞のもつ主体変化と維持動作の二面性に起因するものと主張することに問題はない。加えて、客体変化動詞において観察される中和現象も、4.3節で述べた客体変化結果維持動詞が持つ特性と「維持動作の強制」というメカニズムによって説明可能と思われる。さらに、宇和島方言における非限界動詞で見られるヨル形とトル形の対立の中和に対応する現象が高知方言に存在しない理由を、高知方言のチュウ形には開始限界達成を意味する用法がないという差異に求めることが可能である。そして、この説明は、宇和島方言で中和が見られるが高知方言ではユウ形とチュウ形の対立が見られる現象動詞についても適用可能である。この種の動詞には、注9で述べたように、「響く」、「燃える」、「揺れる」といったものが含まれるが、これらの動詞は、「瞬間」テストにパスし、「いつ」テストとナガラ／ママ交替テストにパスしないため、非限界動詞として分類される。したがって、開始限界達成性をトル形が表現可能な宇和島方言においては、ヨル形とトル形の中和が見られるが、高知方言では、対応する中和現象が見られないのである。

しかし、なぜ宇和島方言は、高知方言において中和しない動詞（「聞こえる」といった感覚動詞、可能動詞、超過動詞）にもヨル形とトル形の中和が見られるかという問題については、まだ疑問が残る。この点について、以下で考えよう。

「聞こえる」、「におう」といった感覚動詞、そして実現系可能の用法での可能動詞がヨル形とトル形の中和を見せる理由は、両者ともに開始限界を持っているためと思われる。すなわち、「聞こえる」、「におう」といった感覚動詞、および実現系可能を表現する可能動詞は開始限界を持つ動詞とみなすことが可能であり、宇和島方言においては、ヨル形が限界未達成性を表現し、トル形が開始限界達成性を表現することによって、中和現象が発生すると考えられる。

では、「甘すぎる」のような超過動詞で宇和島方言のヨル形とトル形の中和が見られるという工藤(1983, 1995)の観察はどのように説明されるのだろうか。これに関しては良くわからない部分が多い。宇和島方言では、存在動詞はヨル形を持つものの、特質を表現する状態動詞はヨル形を持たないとされている。よって、特質を表現する状態動詞である「甘すぎる」がヨル形を持つ

という事実は、この一般化の例外と考えられるが、詳しい記述がなされていない。このように比較検討するだけのデータがないため、この差違に関しては態度を保留したい。

このように、宇和島方言におけるヨル形とトル形の中和現象は、今回考察の対象から外した超過動詞を除けば、高知方言に見られる中和を成立させるメカニズムに加え、トル形とチュウ形の意味・用法の差を考慮することによって十分に説明可能と思われる。

6. おわりに

本論文では、従来指摘されてきた状態動詞の二分法に対し、高知方言が形態的な裏付けを与えることを主張し、高知方言に見られるユウ形とチュウ形の中和現象から、従来その位置付けが困難であった長期活動動詞、現象動詞、心理動詞などが結果維持動詞として分析されることを見た。さらに、中和現象の重要な要因として、変化の結果出現する状況が持つ二面性があげられることを指摘した。

その一方で、数多くの課題が残っている。ここでは、重要と思われる4点を指摘して、本論文をしめくりたい。まず第一に、高知方言において「あっチュウ」という表現が不自然な場合があるのはなぜかという課題が残っている。何らかの語用論的な理由によって、この形が不自然であると思われるが、その理由は依然として判然としていない。

さらに、なぜ関係動詞と特性動詞にチュウ形が可能で、潜在系可能の意味で使用された可能動詞および超時的に使用された状態動詞にチュウ形が不可能かという点に関しても答えが与えられていない。これに関してもさらなる考察が不可欠である。

続いて、着衣動詞、客体変化動詞に見られる中和に関して残された課題について述べる。これらの非難という特殊な環境に置かれると中和を見せる動詞に対し、本論文では「非難の文脈に置かれることで、客体変化結果を維持するという意味合いが発生する」と分析した。しかし、この分析は、なぜ脱衣を意味する再帰動詞やとりはずしを意味する客体変化（移動）動詞で中和が見られないかを説明しない。これに関してもさらなる考察が行われねばならない。

最後に、高知方言とその他の方言との差異について残された課題について述べる。本論文では、高知方言と宇和島方言のアスペクトにおける差違について論じたが、その他の西日本方言との比較はまったく手つかずになってしまっており、高知方言が西日本方言においてどのような位置を占めているかが明らかになっていない。この種の方言間の対照研究もより一層綿密におこなわれねばならない。

注

- 1 高知県の方言は、幡多方言と高知方言に大きく2分されることが知られている（吉田 1982）。本稿でターゲットとなる高知方言は、高知市を中心とする地域で話されている方言である。
- 2 本論文の筆者(36歳)は、18歳まで高知県高知市で生活している。これ以降出現する高知方言のデータは、本稿の筆者の内観も含め、畠山美賀子氏(57歳)、長岡雪美氏(35歳)、橋田亜由美氏(30歳)、大寺希枝氏(23歳)にお手伝いいただいた。

- 3 井上(1998)は、高知方言には「おっチュウ」という形はないと述べている。しかし筆者の調査では、すべてのインフォーマントが、パーフェクトの用法であれば、「おっチュウ」という形式が可能であることに同意している。
- 4 工藤(1995)が指摘するように、「会議がある」といった出来事名詞を取る「ある」は動的な事態を表現する。それ故に、この種の「ある」の場合、ユウ形とチュウ形の対立が普通に存在する。
- 5 この関係動詞がチュウ形を持つという事実は、山岡(2000)の関係動詞には変化動詞の用法も存在するという観察を裏づけていると言えるかもしれない。
- 6 「～すぎる」という超過動詞が一時的な状態を表現する場合は、ユウ形が可能である(査読者からの指摘)。例えば、お風呂のお湯が熱すぎるので水で埋めているような状況では、「まだお湯が熱すぎユウけ、入ったらいかんぜよ」に例示されるようにユウ形が可能である。
- 7 ただし、(17)に見られるように、潜在系可能な場合、ユウ形、チュウ形ともに存在せず、ル形のみが可能であるという点に注意せよ。
- 8 奥田(1983)は「押さえる」を「ふれあい」を表わす動詞と分類しているが、「押さえる」には接触の意味あいに加えて、「動かないように固定する」という「もようがえ」の意味があると考えられる。
- 9 工藤(1995)の言う現象動詞の中で、「響く」、「燃える」、「揺れる」といった動詞は対立を見せる。また、「だまる」、「咲く」といった動詞は便宜的にここに入っている。
- 10 ここで、結果維持動詞と呼んでいる動詞は、金水(2000)における弱運動動詞を基本的に含む。ただし、金水(2000)において弱運動動詞とされている「止まる」は、本論文で用いる結果維持動詞には含まれない。実際、「止まりユウ」と「止まっチュウ」は意味的に対立する。
- 11 森山(1988)は、結果維持動詞にはハジメルが付かないと述べている。
- 12 例外的に、長期活動動詞は(27b)にパスしない。この問題については、4.2.2節を見よ。
- 13 ただし、すべての「のる」の用法がこのテストをパスするわけではない。「飛行機にのる」における「のる」は「変化結果維持」の側面がなく(査読者の指摘による)、「飛行機に乗りはじめた」は繰り返し動作の読みしかない。ここで問題にするのは、変化結果維持の側面を持つ「サーフボードにのる」の「のる」に例示されるような用法である。
- 14 限界動詞の一種である主体変化動詞のテストとして、金水(2000)の「さっき～したから、当然今～している」というフレームを用いるものが有名である。しかし、広く主体変化動詞とされている姿勢変化動詞、保持動詞はこのフレームに入りにくく、本論文ではこのテストを用いなかった。さらに、このテストに関しては工藤(1982, 1995)が指摘するように、テイル形には客体変化結果を表現する場合もあることに注意せよ。
- 15 工藤(1983)は、宇和島方言における姿勢変化動詞、保持動詞、現象動詞のヨル形に関して、同様の主張をおこなっている。
- 16 「聞こえながら」は、逆接読みならば容認度が高い。同様の指摘は、(47c)の「見えながら」にもあてはまる。

参考文献

- 荒正子(1989)「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学 3』, 147-162, むぎ書房
- 井上恵理(1998)「土佐方言のアスペクト」『大妻女子大学大学院文学研究科論集』 8号, 53-70, 大妻女子大学

- 奥田靖雄(1983)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会(編)『日本語文法・連語論(資料編)』, 158-234, むぎ書房(初出は『教育国語』12, 13, 15, 20, 21, 23, 25, 26, 28)
- 奥田靖雄(1986)「現実・可能・必然(上)」『ことばの科学1』, 181-212, むぎ書房
- 金田章宏(2004)「青森県五戸方言形容詞の〜クテル形式」, 工藤真由美(編)『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』, 134-165, ひつじ書房
- 木部暢子(2004)「福岡地域のアスペクト・待遇・ムード」, 工藤真由美(編)『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』, 166-186, ひつじ書房
- 金水敏(2000)「時の表現」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』, 3-92, 岩波書店
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 48-63, 日本言語学会(金田一(1976)に所収)
- 金田一春彦(編)(1976)『日本語動詞のアスペクト』, むぎ書房
- 工藤真由美(1982)「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』, 13(4)号, 51-88, 武蔵大学
- 工藤真由美(1983)「宇和島方言のアスペクト(1)」『国文学解釈と観賞』, 48(6)号, 101-119, 至文堂
- 工藤真由美(1989)「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学3』, 53-118, むぎ書房
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』, ひつじ書房
- 工藤真由美(2004a)「現代語のテンス・アスペクト」, 尾上圭介(編)『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』, 172-192, 朝倉書店
- 工藤真由美(2004b)「研究成果の概要—アスペクト・テンス・ムードを中心に」, 工藤真由美(編)『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』, 34-76, ひつじ書房
- 渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33(1), 1-262, 大阪大学
- 鈴木重幸(1965)「現代日本語動詞のテンス—言いきりの述語に使われた場合—」『国立国語研究所論集 ことばの研究』2, 1-38, 秀英出版
- 鈴木重幸(1979)「現代日本語の動詞のテンス—終止的な述語につかわれた完成相叙述法断定のばあい—」『言語の研究』, 5-59, むぎ書房
- 鈴木重幸(1983)「形態論的なカテゴリーとしてのアスペクトについて」『金田一春彦博士古希記念論文集 国語学編 1巻』, 435-460, 三省堂
- 高橋太郎(1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』, 秀英出版
- 畠山真一・加藤恒昭・伊藤たかね(2006)「高知方言からみた思考動詞の語彙的アスペクト」*Morphology and Lexicon Forum 2006* 予稿集, 1-2
- 樋口文彦(1996)「形容詞の分類—状態形容詞と質形容詞—」『ことばの科学7』, 39-60, むぎ書房
- 村上智美(2004)「形容詞に接続するヨル形式について」, 工藤真由美(編)『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』, 188-203, ひつじ書房
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』, 明治書院
- 山岡政紀(2000)「関係動詞の語彙と文法的特徴—照合行為の介在をめぐって—」『日本語科学』8, 29-53, 国書刊行会
- 吉田則夫(1982)「高知県の方言」『講座方言学 8巻 中国・四国地方の方言』, 427-449, 国書刊行会

謝 辞

本論文は、伊藤たかね氏、加藤恒昭氏、青木葉子氏、龍美也子氏との議論に多くを負っている。

また、石田邦子氏にもお世話になった。もちろん、本論文の誤りはすべて筆者の責任である。本研究は、東京大学21世紀 COE〈心とことば—進化認知科学的展開〉に助成を受けている。

（投稿受理日：2006年10月16日）

（最終原稿受理日：2007年1月22日）

畠山 真一（はたけやま しんいち）

尚絅大学文化言語学科

861-8538 熊本市榆木6丁目5-1

htktyo@gmail.com

Yû-form and *chû*-form in Kochi dialect and classification of verbs

HATAKEYAMA Shin-ichi

Shokei University

Keywords

Kochi dialect, aspect, change of state verbs whose resultative phases are maintained by agents, classification of verbs

Abstract

Unlike Tokyo dialect, Kochi dialect has a ternary aspectual system which consists of *ru*-form (perfective), *yû*-form (imperfective), and *chû*-form (perfect). Based on the analysis of the opposition between *yû*-form and *chû*-form and of neutralization of them, this paper argues the following:

- (1) The aspectual system of Kochi dialect gives morphological evidence to the proposal that stative verbs are classified into two types, stative verbs denoting temporary states and those denoting constant characters.
- (2) Neutralization of *yû*-form and *chû*-form is mainly observed in verbs denoting both change of states and activities of maintaining the resultative states. This phenomenon results from coidentification of the resultative phases denoted by this type of verbs and the activity phases denoted by them.
- (3) Verbs denoting natural phenomenon, verbs denoting long-term activities, and psych-verbs should be categorized as verbs denoting both change of states and activities of maintaining the resultative states.